
死から始まる。

藤宮 佐久良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死から始まる。

【Nコード】
N 6 6 8 2 V

【作者名】
藤宮 佐久良

【あらすじ】
物静かで少し風変わりな少女と

かなり高い頻度で元気な少年の

小さな物語。

綿貫と穂積。

キンコーンカーンコーン。

四時間目終了のチャイムが校内に響き渡った。

「…っ」

本校舎の隣には、生徒がほとんど来ない寂れた校舎がある。

その屋上で、男生徒は泣いていた。

「…あれ」

そこに、女生徒がバッグを下げてやって来る。

「…」

男生徒は慌てて袖で涙を拭った。

女生徒はそんな男生徒を気にする事なく、日影の下へ座りに行った。

「…」

男生徒は、涙が込み上げてくるのをぐっと堪える。

それを見ていた女生徒は、ため息交じりにこう呟いた。

「…別に泣いても良いと思うな。何があったかは知らないけど、辛

いつて思つなら泣けば良い。ボクの事は空気だと思つてさ。」

「…！」

淡々としやべる女生徒を見て、男生徒は睨みつけた。

「…見ず知らずの他人に言われる筋合いはないって事？」

嘲る様に女生徒は言った。

「…そう言つ訳じゃ…ないけど…。」

不満そうに顔を歪める。

「…あのさあ…ウジウジしないでくれる？はつきり言つてウザい。」

「…そんなこと言われたって、だって…フラれたら誰だってウジウジしちゃうでしょ！」

「…でしょ！」

とか言われてもボクは…人を好きになつた事なんて一度も無いし。その手の話は良く分らない。」

小説を取り出し、目を伏せてそう言った。

「……………そうなの？」

「…うん、まあ。」

「…。」

「…。」

一度、話が途切れる。

暫くしてから、男生徒が口を開いた。

「…オレン家、父親が人殺しなんだ。」

「…………ふうん。」

さして驚く事なく、女生徒はそう答えた。

「えっ？ふうんって…それだけっ？びっくり…しないのっ？」

「うん、ってか十分有り得るし。」

「…？」

男生徒は首を傾げる。

「ああ…コツチの話だから気にすんな。それで…父親が人殺しで何？」

女生徒が強引に話を戻していく。

「…………彼女がいたんだ。でも、父親のこと話したら…そう言っのムリだからって…フラれた。」

「…」

女生徒は、その言葉遣いの変わり様に少々驚き、目を見張る。

「…」

「…で…泣いてたと。」

「…。」

男生徒は黙って頷いた。

「それは相手を間違えたんじゃない？」

「え…」

「まあ？恋愛経験ゼロのボクが大層な事言える立場ではないけれども。」

相手がどういう人か、見定めるのも必要な事だ。……泣きたく無いならな。」

「…」

男生徒は再び涙を流し始める。

「え。何…ボク、なんか変な事言った？」

今までポーカーフフェイスを貫いていた女生徒が焦った様に男生徒に近づく。

「…違…っ！そんな事言ってくれたの…貴女が初めてだったから、嬉しくて…！」

「…気に…障る様な事言った訳じゃないんだ…？よかった…。」

女生徒は本当にホッとため息をついた。

「…優しいね、貴女って…。」

「…綿貫。綿貫蛭、二年四組だ。どう呼んでもらっても構わない。」

「二年って…じゃあ貴女、先輩っ？」

「…いや、知らないから。」

蛭がそう答えると、男生徒はそうだよなといって苦笑した。

「オレの名前は穂純遊。一年二組。」

「そう、よろしくな、穂純。」

「う…あ、はい。綿貫先輩。」

「…タメ口で構わない。日本のタテ社会なんて下らないからな。」

元いた場所に座り、再び本を開いた。

「…そう？。」

「……………」

二人は喋らないまま時間だけが過ぎて行く。

その沈黙を破ったのは意外にも蛭だった。

「……………あ。そろそろ戻らないと授業が始まるぞ。」

「…先輩は戻らないの？」

「…一緒に行ったら、お前との仲を誤解されるからな。面倒事は嫌いだ。」

「…分かった。じゃあ。」

そう言って遊は、足軽に去って行った。

「…大分立ち直れた様だ…よかった。」

もう会わないかも知れないけれど。

少女は本と、食べる筈だったお弁当をバッグにしまい、ゆっくり下に下りて行った。

日常茶飯事な事。

「あ。やっぱりここにいた。」

「……何しに来た、穂純。」

次の日の昼休み。

寂れた校舎の屋上で本を読んでいた蛭に話しかけて来たのは遊だった。

「……先輩、先輩の話を知りたいんだ。質問に答えてくれる？」

「……そんな事の為にわざわざ来たのか？ヒマだな。」

少し目を見開き、本を閉じた。

「……昨日、オレの父親の事……有り得るくって言ったよね。あれは……何で？」

「……少し、話がそれるが……良いか？」

遊の問いに、蛭はゆっくりと問い返す。

遊が頷いたのを確認すると、蛭は再び口を開いた。

「…人間は、ニュースなんかで事件があったとかって聞いたら、恐いねとか、気をつけようねとか…話すだろう？
でも…心のどこかでは、きつとこう思っている。自分は大丈夫。こんな事、起こる筈無い…って。」

「…」

蛍の言葉に、遊はホントにその通りだと思った。

確かに、自分は平気だと…心のどこかで思っているかもしれない。

「実際には、そんな事無いとも…断言出来ないのにな。人間は馬鹿で、愚かだから…仕方が無いのかもしれない。けれど。」

「…。」

蛍の瞳に、強い光が宿る。

「だからこそボクは…ボクだけでも、あらゆる事が起こり得ると…常に思っている。」

そう思わなきゃ…やってられないから。」

辛そうに顔を歪める蛍。

「…っ」

そんな蛍に、遊はかける言葉がなかった。

何も言わず、ただ黙っているだけの二人。

その沈黙を破ったのは、背の高い男生徒だった。

「…お、蛭。やっぱりここにいたか。」

「……龍平？」

龍平と呼ばれた男は、無愛想のまま、遊に顔を向ける。

「…？」

「あ、えつとオレ…一年の穂純遊って言います。よろしくお願いします。」

「ああうん。オレ、一路龍平。二年四組、蛭の幼なじみ。よろしく。」

「…。」

随分、淡泊な人だな。

遊はそう思いながら龍平を見上げる。

体格がガッチリしていて、何かスポーツをしているみたいだ。

「…蛭、検査の時間だ。」

いきなり用件だけを伝える龍平。

遊は驚いたが、蛭はポーカークフェイスを崩さなかった。

「面倒だから、サボる。」

「ダメだ。」

「だって検査したって変わらないじゃないか。状況は一度下されたら、それは覆らない。そうだろう?。」

「全く…口だけは達者だな。いいから早く行くぞ。オレだってヒマじゃねえんだ。」

そう言つと、龍平は蛍の白くて細い腕を掴む。

「何すんだよ。」

蛍は小さく抗った。

「…こうなる事も想定内だろ、蛍。」

龍平はそう言つて、ズルズルと蛍を引きずって行く。

「あ、その…誰だっけ。えーっと……そう、ホズミ。蛍の荷物まとめて持つて来て。」

半ば強引に、龍平は遊に頼んだ。

「え?あ、ちょっと待って下さい!。」

遊は慌てて荷物をまとめて龍平について行った。

「…あの。何のための検査…なんですか？」

病院の近くの公園。

龍平と遊は、肩を並べて座っていた。

何故病院の待合室では無いのかと言うと、蛭に>検査結果を知られなく無いから来るなくと釘を刺されたからだ。

「ん？あー…聞いて無いのか？じゃあ…言わない。本人から聞け。」

「……………分かりました。」

それ以上二人は何も話さなかった。

「…」

何の為の検査なのか分からない遊は、眉間にシワを寄せて無事祈った。

「あれ。穂純…まだ居たんだ。そして龍平は帰ったんだな。」

遊が公園で待っていた事に、蛭は目を見開く。

「うん、先輩もわざわざ寄ってくれてありがとう。
てか検査長いね…三時間もかかるんだ。」

「…まあ。」

「……………何の…病気なの？」

ずっと考えていた事を、遊は思い切って尋ねた。

「…穂純はいつもいつも、想定外のコトしてくるよな。」

ため息交じりに蛭はそういう。

「…褒めてるの？それ。」

遊は小首を傾げた。

「ああ。色々世界が覆った、ボクなりに褒めている。

病気の事、お前がどうしても知りたいと言うなら、教えよう。」

「……………知りたい。」

「

少し考えて、遊ははっきりとした口調で言う。

「……………どうしても、か？」

「……………どうしても。」

「……………」

蛭はもう一度ため息をついてから、遊に向き直りながら座った。

「…四年前。いきなり、言われた。長く持っ後…五年だろうと。」

「…えっ！」

遊は、驚きの声を上げる。

「…いつ、動かなくなってもおかしくないと言う事だ。」

「……そんなに…すごい病気なの？」

遊にそう問われて、蛭は首を横に振った。

「…そうじゃない。ボクが患っているのは大動脈弁閉鎖不全症といつてな。ドナーが見つかるまで、手術出来ないだけだ。だから今は、化学療法。」

ニツコリ微笑む蛭を見て、遊はこう言った。

「…じゃあ…遊ぼう！」

「…は？」

「あ、間違えた。やりたい事やろうつよっ、先輩の！ね？」

「…そういうの…良いや。嫌なんだ…誰かと思いい出作りとか。

ボクが死ぬことは覆らないのに、誰かと思いい出を作って、誰かをその思い出で苦しませるのは…ダメだ。じゃあな。」

またしても完璧に微笑んで、蛭はその場を去って行った。

「…あ…れ？なんでオレ…泣いてるんだ？」

どうしようもなく流れて来る涙を、遊は止める事が出来なかった。

「…先輩が、全てを起こり得るものとして考えているのは…自分自身が有り得ない状況に置かれているからなのかな…。」

途切れ途切れに遊はそう言って…その場に座り込む。

そして泣きつづけた。

自身の涙が枯れ果てるまで…。

それから暫くして、遊はふと思った。

「なんでオレ…こんなに泣いているんだよ…？」

>アイツにフラれた時だって、こんなに泣かなかったのに<

「オレ、もしかして…先輩の事を…？イヤ、でも……………」

遊は一人、首を捻った。

夏の話。

「夏と言えばなんですか、先輩方っ！」

「図書館で学習。」

「甲子園。」

「…」

二人の温度差に驚きながら、遊は頬を指先で搔く。

「何？急に。」

螢は眉をひそめて、そう問う。

「えっと…母の知り合いから、海のリゾート招待券貰ったんだ。よかったら、三人で一緒に行かない？」

遊の言う海のリゾートとは、最近出来た施設の事だ。

海の近くに遊園地が設置され、一つのパークになっている。

「……オレ、パス。遊んでるヒマねえし。練習があんだよ。野球のな。」

蛍の口が開いた時、龍平はそう言った。

「…そう…ですか……あの、蛍先輩は？」

「…」

蛍は、断るつもりだった。

面倒だからと。

そう口で話せば、きっと遊は、諦める筈だ。

しかし遊は悲しむだろうし…。

等といろいろ考えた結果。

「…行つてやる。日時は？」

そう、蛍は決めた。

「…っ！えーっと…八月六日です。九時に家にお伺いしますね！」

「ん。了解。」

そうしてその日は、案外早くやって来たのだった。

八月六日、午前九時三十分。

蛍の家の、インターホンが鳴る。

「はい、どちら様ですか？」

蛍では無い声が、インターホン越しに聞こえてくる。

「えっと…穂純です。わた…蛍先輩を迎えに来ました。」

「…少々お待ち下さい。」

そこで、インターホンが切れる。

暫くして、小さめのリュックを背負った蛍が出てくる。

白い半袖のパーカーの下に青と白のボーダー柄シャツ、チャコールグレーの半ズボンを身に纏った蛍の姿が遊の目に飛び込んだ。

「…！」

初めて…先輩の私服姿を見た気がする。

「…どうした、穂純。顔…赤いけど。」

「えっ？えーっと…あの…先輩が、か…可愛くなって…思って…」

そついうとさらに頬を染め、手で顔を覆う。

「…コラ。そんなコトすると、女子みたいだぞ。お前は男だろ、穂純遊。」

蛭は指で遊の額を軽く小突いた。

「…初めて…フルネームだけど、名前読んでくれた…」

「…？」

「すっげえ嬉しい！」

満面の笑みで、遊はそういった。

「じゃあ、これからは遊って呼ぼうな。」

その喜びをもつと味わってほしいと思った蛭は、そういつて微笑む。

「…なつ、なんか…今日の先輩、おかしいよっ？熱でもあるんじゃないあ…」

「ねえよ。」

そんな風に、二人が談笑していた時だった。

一人の男が声を上げる。

「蛭っ！お前、男と行くのかっ！」

その荒々しい言動から、蛭の父親だと検討がつく。

蛭はウンザリした様にため息をついて口を開いた。

「…何の用だよ、父さん。」

「お前！男と海に行くのか！それじゃあまるで…っ」

顔を真っ赤にして起こるその姿は、茹でダコみたいだ。

「良いじゃん。これが、ボクが過ごせる夏の…唯一の思い出になるんだからさ。」

落ち着いた口調で、蛍はそういう。

「…っ」

父親は返す言葉を失った。

いつ最期を迎えるか分からない娘に、そこまで言われては、全く齒がたたない。

「…行こう、遊。」

蛍は踵を返して去っていく。

「あ、待って！先輩っ！」

遊は慌てて蛍の父親に一礼して、走って行った。

「…」

そんな二人を、父親は浮かない顔で見ていた。

「…良いの？あんな事言って…」

ぐいぐい進んで行く蛭に、遊は後ろを気にしながらそういった。

「良いんだよ、別に。だって本当の事だし。」

「…」

そう聞いて、遊は表情を曇らせる。

「…なんで遊が暗い顔してるんだ？当事者は、ボクだぞ。遊が気にする事じゃない。」

蛭は優しく微笑み、そういった。

「…そうだけど…」

遊は苦しそうに呟いた。

「……あー…この話は止めよう。せっかく遊びに行くんだから、楽しまなくちゃな。」

蛭は遊の肩を叩いてそう言った。

「…」

（何やってんだ、オレ。先輩に気を使わせちゃいけない！オレがしつかりしないと…！）

「先輩！荷物持っから貸して！」

「え。あ…うん。」

蛭は自分の肩から荷物を下ろして、遊に手渡す。

「よっしゃー！遊ぶぞーっ」

「…ああ。」

蛭は嬉しそうに、静かに微笑んだ。

「…あつつい…」

「…大丈夫？」

灼熱の太陽が、容赦なく照り付ける。

蛭は日影から一步も出る事が出来なかった。

「…遊園地の方に行く？海じゃなくってさ。」

「…良い、行こう。ボク、海に入った事無いから。」

そう言って、羽織っていた上着を脱ぎ捨てて、日なたに出る。

「あ、ちよっと！上着は脱ぎ捨て無いのー！」

遊は、口ではそう怒りながらも、心の中では嬉しくて堪らなかった。

「やっぱりオレ……」

そう言っただけで遊は、虫の事を愛おしそうに見つめた。

「遊、何してるんだ？早く泳ぐぞ。」

「うん……！」

「よし、次は遊園地でいっぱい遊ぶ。」

洋服に着替え終わった虫は、遊の手を取る。

「……！」

遊の顔がどんどん赤くなって行っただけ。

「さ、行く。」

「うん……！」

嬉しそうに遊は頷いた。

「……何に乗る？」

「うーん……何乗りたい？」

「え、逆に…？」

蛭は目を見開き、足を止める。

「んー……あ。アレ乗りたい。」

そう言っ指差したのは、絶叫系ジェットコースターだった。

「え…ほ、ホントに…？」

「うん、楽しそう」

蛭は僅かに笑う。

「……わ、分かつ…た。」

遊は意を決した様に、唾を飲み込んだ。

あれから約十分後。

ジェットコースター付近にあるベンチの上に、一組のカップルが座っていた。

遊と…蛭だ。

「…う。」

遊は辛そうに口を押さえている。

「……ムリならムリって言えば良いのに。」

ため息交じりに、蛭はそう言った。

「だ……だって、先輩がすごく楽しそうにしてたから……」

「……」

> やっぱり、遊はいつも想定外で予想外だ……<

「……？先輩？どうかした……？」

「ちよつとトイレ行って来る。」

「え？あ……うん。行ってらっしゃい。」

遊は笑顔を取り繕って、蛭を送り出す。

そして姿が見えなくなると深いため息をついた。

「……ヤベエ……オレ超カツコ悪い……」

そして、自己嫌悪に陥ってしまった。

「あー！もうっ！何やってんだよ……せっかく、先輩に楽しんでもらおうと……思ったのに……」

遊は肩を落として、うなだれてしまう。

「全然、楽しいけど？」

ジュースを差し出しながら、蛍は幸せそうに微笑んだ。

「わぁ！び…びっくりした…！」

「…遊は反応が超楽しいからな。良い後輩を持った。」

「…」

遊の胸に、蛍の明るい声突き刺さった。

> やっぱり年下扱いなんだな…なんかちょっと…ううん。かなり…
辛い。<

「…何？どうした？」

いきなり顔色が変わった遊を見て、蛍は動揺する。

「…なんでも無いよ、先輩。ホントに。」

すぐに遊は、微笑み返す。

「…」

なんでも無い筈が無い…と思った。

あらゆる事を想定内として考えてる様になってから、人のちょっとした変化にも敏感になった蛍だから、分かる事だ。

「……」

蛭が何か言いかけた時だった。

一人の女が声を上げる。

「なんでえっ？」

「……」

>何故ボクが発言しようとする度に邪魔される？<

「……なんでって……オレ、他に好きな奴が出来たから……」

一組のカップルのいざこざの様だ。

「……やだ！見捨てないでよ、私の事！
悪い所があるなら直すからあ！」

「……」

「……どうしてもって言うんなら、私、ここで死んでやるっ！」

そういつて彼女は、ナイフを自分の喉元に向ける。

「……」

彼氏の方は、そういう所が嫌なんだと言わんばかりのウンザリ顔だ。

「…」

成り行きを見ていた遊は、深いため息をつく。

その遊の視界に入って来たのは、颯爽と歩く蛍の姿だった。

「…ねえ。事情はよくわかんないけど、とりあえずすごいウザい。」

彼女に向かって、蛍はそう言い放つ。

「だ…誰よ、アンタ！もしかして…リン君の好きな人…？」

彼女はそう言われ、蛍は鼻で笑った。

「は…っ！勘違い甚だしいな。言っとくがボクは、ただの通行人だ。ボクが言ってる事などは、戯言だと思っても良い。だがまあ、とりあえず聞いてくれるか？」

「…」

「まず初めに、それしきの事で死ぬなんて、命に失礼だと思わないか？」

アンタが生きているのは、アンタの父親と母親が懸命に育ててくれたからだ。

なのに死ぬとか、有り得ない。」

「…」

女が気まずそうに目をそらす。

「…生きたくても生きられない人間は、いっぱいいる。そいつらに
恥じない生き方をしなよ。」

きつぱりとした口調で、蛭は言った。

「ちょ…ちょっと先輩！何してるんだよ！」

「え？あー…生命を大事にしない不遜な人間が、ボクは大嫌いだね。」

「全くもう…」

口では明るく言いながらも、内心は暗く淀んでいた。

「…よし。次はお化け屋敷だ」

「う…えっ？マジで？」

「ん。」

「…」

あれから約二十分後。

お化け屋敷付近にあるベンチの上に、一組のカップルが座っていた。

遊と蛭だ。

「……」

「だから……そう言う事は早く言って。」

「だつて〜!」

「全く……何か欲しいのあるか?あるなら買つて来るが?」

そう言つて蛭はベンチから立ち上がる。

「……ううん。少し、一緒にいて。」

そう言つて遊は、蛭の腕を掴んだ。

「……分かった。」

そういつて微笑んだ蛭も、蛭の返事に嬉しそうに微笑んだ遊も、頬の色が同じ赤色だった。

「……先輩、変わった。」

不意に、遊がそんな事を言う。

「そうか?」

蛭は首を傾げた。

「自分じゃ……気づいて無いかもだけど、よく……笑う様になった。」

そう言って遊は再び微笑む。

「…だって、面白いじゃん。遊は。見てて、飽きないし。」

「…っ」

またしても、遊の胸が痛む。

「…ホントに…良い友達だ。」

しかし螢は、その変化に気づかない。

「……先輩。」

「？な、に…」

螢は遊の方を向き、言葉を失う。

あまりにもその目つきが真剣だったので、螢が気圧されているのだ。

「あの、さ……………」

「うん…？」

「……オレ…先輩の事……………」

「…」

螢の頬も遊の頬もどんどん赤くなって行く。

その時だった。

携帯の着信音が鳴る。

「…あ、悪い。ボクのだ。」

そう言うと、バッグから携帯を取り出す。

「……父さんから……」

ため息交じりに蛭はそう言って、通話ボタンをおして耳に当てる。

「はい、何の用？」

この短い問いでさえ最後まで言うことが出来ずに、父親に遮られてしまった。

「蛭っ！今何時だと思っているんだ！」

「…今……」

携帯を耳から離し、時刻確認をする。

「…七時四十七分。」

「そんな事は聞いて無い！」

「…」

「良かった？今すぐに帰って……！」

「父さん、ソレ、ムリ。」

そう言うと、切断ボタンを押した。

「…で？話…何？」

「…」

「…？あ、遊。観覧車乗ろう。観覧車。」

「…」

>…誘ってるのか…？いや、違う。この瞳の輝き方は…<

「乗った事、無いんだよな。」

「…」

>…やっぱり…<

遊はこっそりため息をつく。

「行こう。あ、観覧車は平気か？」

「うん、大丈夫。」

「そう。じゃあ…行くぞ。」

蛭に手を引かれて、遊は走って行った。

「…うわ…………高っ！こっわっっ！」

向かい合わせに二人は座っていたが、蛍は遊の隣に座り直して、遊の右腕に蛍は自分の腕を絡めた。

「…！」

一気に遊の顔が赤くなる。

「…」

遊はカチコチになりながら蛍を見ると、蛍の体は小刻みに震えていた。

「…高いの、苦手なの？」

「…………うん…」

「でも、ジェットコースター…」

「だって一瞬だし。」

泣きそうな声で、蛍は言う。

「…」

遊は言葉を失った。

じゃあ何故、観覧車に誘ったんだ…？

「…どうして…」

遊は思わず心情が漏れてしまう。

「……気分転換…してもらおうと思った。ボク、遊園地で…ミスばつかして…遊の気分を損ねちゃったから…」。

綺麗な景色が見える（と思われる）観覧車に乗ろうって…思って…」

外に目をやることが出来ないため、蛍は遊の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「…っ」

遊は胸が苦しくなって、抑え切れなくなってしまふ。

「ごめん、先輩…！」

「え…？」

何の事か。

そう聞き返す間もなく、唇を塞がれた。

「…」

蛍は一瞬…何をされたか分からなかった。

数秒後、ようやく理解する。

蛍は…遊にキスをされたのだ。

「…！」

蛍の頬が、カッと赤く染まっていく。

「ホントに…ゴメン…」

暫くして、遊は蛍から体を離れた。

「ちゃんと…我慢してたんだ。

けど…先輩を好きって気持ち…抑え切れなくなっちゃって…どうしようも無かった…。」

辛そうに、一言一言を噛み締める様に、遊は言う。

「……」

こういう時ほど、返事に困る事は無いと…蛍は思った。

けれど、何か言わないかと思い…口を開く。

「ボクにとって遊は…何考えてるのか分からない、謎の生命体だ。分かり易そうで…難しい。だからボクは、遊の事がちょっと苦手だった。」

「…全然…気づかなかった…」

遊は蛍の発言が意外そうだった。

「…だろうな。だってボク、そう言つの…顔に出ないから。でも、遊に出会って…毎日がキラキラ輝きだした。

苦手だったけれど、一緒に過ごすと凄く楽しくて…一度失った色が、また戻って来たみたいだった。」

「…色を失う…？」

遊は蛍の言っている意味がよく分からない。

基本的に、遊に蛍の話は難しすぎるのだ。

「…ボクは遊の前に居ると、本来の自分に戻れる。龍平の前だって戻れないのに。

それだけ…遊にボクが気を許していると言う事だ。

…けれど。」

「…？」

「…ボクは、ただ自分のために人を利用するのは凄くダメなことだとも思う。

だって、もともとこんな状況に追い込んだのはボク自身だもんな。」

「…」

蛍の言葉に、遊は困惑する。

「……遊がボクの事…そんな風に思ってくれてたって事は、すごく

嬉しい。けれどやっぱり…ボクは、一緒にはなれない。」

そう言っつて、蛍は涙を流して微笑んだ。

「…」

そんな蛍を見て、遊も涙を流す。

そして、やっぱり蛍は悔しい位可愛いと思った。

「…遊。もうすぐで下につくぞ。」

「…うん。」

「今日はサイコーに楽しかった。ありがとな、遊。誘ってくれて。」

そう言っつて、蛍は可憐に微笑んだ。

「ああうん…楽しんでくれて、よかったよ。」

そう言っつた遊は、無理矢理微笑んでいた。

「…」

これが遊と蛍のぎこちない、ひと夏の思い出。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6682v/>

死から始まる。

2011年10月9日13時28分発行